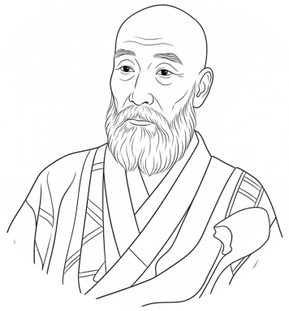
灯火法語

住職
藤谷 信人

忘れまじ
忘れまじと思えども
忘れがちなる
南無阿弥陀仏



（利井鮮妙和上）

●これは、かつて研鑽を積ませていただいた学び舎「行信教校」の創設者、利井鮮妙和上が詠まれたお歌です。

住職として日々の暮らしのなか、お念仏を「忘れまい」と心に懸けてはおります。しかし、恩師や、熱心にお参りくださった門徒方のように、丁寧にお仏事ができているだろうかと我が身を振り返れば、日々の忙しさにかまけて、ついつい疎かになってしまう。そんな私の「忘れがち」な背中を、このお歌はあたたかく支えてくれるようです。

・思えば、人間というものは本当に忘れやすい存在です。

居間で「あれを取ってこよう」と立ち上がり、
意気揚々と台所へ向かったはずなのに。いざ着いてみると
「あれ？私、何をしに来たんだっけ？」

と目的を忘れてしまう。　冷蔵庫の前で立ち尽くし、
結局手ぶらで居間に戻って座り直した途端に、
「そやった、そやった！」と思い出す。
そんな経験は誰にでもあるでしょう。

日常の物忘れだけではありません。心に誓ったはずの立派な心がけも、いわゆる「三日坊主」で、三日も経てばその誓いをすっかり忘れ、またいつものように怒ったり愚痴をこぼしたりしている。本当に都合よく忘れてしまうのが、私たちの姿ではないでしょうか。こうした日々の「うっかり」は、まだ笑い話で済んでいるのかもしれません。

●ただ、人生の歩みを深めていくなかで、この「忘れる」ということが、自分の力ではどうすることもできない、静かで切実な重みとなって迫ってくることがあります。

正直に言えば、私自身はまだ「老い」を実感できていないのかもしれません。ですが、実家のおばあちゃんの姿を思い返すと、老いとは、大切にしていたことさえも一つひとつ忘れていかねばならない切ない道のりなのだと気づかされます。

お話が大好きで、九十を過ぎても本当に元気だったおばあちゃんでした。しかし、同じことを何度も言うようになり、少しずつ、いろんなことを忘れていきました。

九十六歳で生涯を終えるまでの、晩年の二年ほどは病院のベッドで過ごしました。身体はだんだんと思うように動かせなくなり、補聴器をつけてもわずかしか聞こえなかった耳も、いよいよ音を失っていきました。家族が側にいない病院という環境の変化が、物忘れにさらなる拍車をかけたのかもしれません。病院での日暮しのなかで、老いゆく日々は、おばあちゃんの記憶を一粒、また一粒と、その手から忘れさせていったのです。

それでも、お見舞いにいつ行っても、おばあちゃんは
「よく来てくれたね」と本当に嬉しそうに喜んでくれました。
その笑顔に救われる思いでしたが、忘却の波はさらに深まっていきます。今日が何月何日なのかもおぼつかなくなり、ついには、あんなに可愛がってくれた孫である私に対しても、
「あんた誰やったかな？」と、
どこか遠くを見るような目で言うようになりました。
目の前にいるのが誰なのか。共に過ごした日々の記憶さえも、静かに病院の天井を眺める時間のなかで、
すべて忘れ去られていったのです。

老いのなかで大切なことすら忘れていく姿は、決して他人事ではなく、やがて誰もが歩む道です。

元気なうちは「お念仏を忘れまい」と心に誓っていても、病や忙しさの中で、仏さまのことすら忘れてしまう。それが、偽らざる私たちの姿なのでしょう。

●しかし、浄土真宗のみ教えの尊さはここからです。
すべてを忘れ、たとえお念仏さえ忘れてしまったとしても、
ご安心ください。
阿弥陀如来は、「わが子を抱きとる親」のように、
「ひとたびとりて、ながくすてぬなり」と、
私たちをあたたかく抱きとめてくださっています。
この「親」である仏さまは、一度その腕に抱き取った命を、
決して見捨てはしません。
あなたが仏さまを忘れ、たとえ自分のことさえ思い出せなくなったとしても、仏さまだけは、あなたを忘れることはない。
そんな変わらない願いを、今も届け続けてくださっているからです。

そんな仏さまのぬくもりに包まれてみれば、このお歌は、どこか朗らかで、温かな響きをもって聞こえてきます。己を嘆いているその口からは、すでに「南無阿弥陀仏」とお念仏がこぼれ出ているからです。お念仏がこぼれ出て、今まさに、声となってはたらく仏さまと出遇う。
たとえ、自分の名前さえ
記憶の霞の中に消えてしまったとしても。
「安心なさい」、と阿弥陀さま。
ほら、ここにあなたを、決して忘れない親（ほとけ）さまが
今もご一緒です。

南無阿弥陀仏